巻頭言

教父研究に寄せて

塩谷惇子

教父エイレナイオスに出会ったのは、一九七八年、ローマのグレゴリアナ大学でアントニオ・オルベ教授の講義を聴講した時であった。それ以来、エイレナイオスの言葉に込められた聖霊の息吹に導かれ、次第に他の教父の言葉にも親しむようになった。

あれから、三十年の歳月が過ぎた。帰国後、創立されて間もない「教父研究会」に今道友信教授が私を連れて行ってくださり、加藤信朗教授に紹介してくださった。その日の記憶は今でも鮮やかに蘇ってくる。その後、「教父研究会」は、私の魂に慈愛と刺激を与えてくれる「大いなる会話」（Great Conversations）の場となった。

この十年余り、研究会には稀にしか参加できず、予定表の埋め尽くされた日々を過ごしている。そんな私は、院生と読み始めた教皇グレゴリウスが『対話』で告白した心境とどこか似ていた。教皇としての日々の勤めに没頭していたグレゴリウスはある時、気が滅入り、引きこもってしまった。「司教としての必要な義務ではあるが、人々のさまざまな用件に関わり、外的な心配りをしている自分の魂は、内的に衰えている。私が失ったものと、今耐えなくてはならないこととを比較すると、私のくじ運が耐えがたい。遂には、失ったものを想い出すことも不可能になるのではないか」(第一巻)。その頃、教皇は若き日々、共に聖書研究をした助祭ペトルスの誘いに乗って神のためにのみ生涯を捧げた聖なる人々の物語を想起し、語り始める。こうして『対話』という作品が誕生した。その単純な信仰と愛に満ちた物語は、院生と私に新鮮な霊的喜びを注いでくれた。若い世代の院生から再び教父の著作を通して魂を潤す「会話」に誘われたことは私にとって恵みとなり、将来を指し示す希望となった。

「教父」というと古代世界のキリスト教著作家をまず想定するが、「教父」は毎日のミサ典文にあるとおり、イエス・キリストの記憶を担い続ける教会共同体を聖なる生き方と教えで導く教会の指導者、現代の「司教たち」や「教皇」でもある。

現教皇ベネディクト十六世は、昨年の暮れ(二〇〇七年)、二番目の回勅『希望による救い』(Spe

Salvi）を発表し、罪と悪の力に翻弄され、苦渋に満ちている人生において、希望を学び、実践する「場」を指し示し、ベトナムの故グェン・ヴァン・トゥアン枢機卿の十三年間におよぶ獄中での祈りの体験を取り上げている。

「希望を学ぶ第一の場は祈りである。祈るとは、歴史を離れ、私的空間に引きこもり、自分の幸せを求めることではない。祈りの正しい方法は内的清めを行うことであり、それによって人は神を受け入れ、自分をも受け入れることができ、何が神にふさわしいことかを学ぶ」（同回勅、三十三番）。

教皇はさらに、希望を学ぶもう一つの場は、誠実で正しい行動と苦しみそのものであると指摘する。「人間であることの真の基準は、苦しみと苦しむ人との関係によって定められています」。「人とともに、人のために苦しむこと・真理と正義のために苦しむこと。愛ゆえに、真の意味で愛する人となるために苦しむこと。これこそが人間であることの根本的構成要素です」（三八、三九番）。

「キリスト教の信仰は、人間性にとって決定的に重要なこのような苦しみを苦しむための新たな深い力を人間に与えたのです。真理と正義と愛は、単なる理想ではなく、きわめて深い現実です。人となった真理と愛である神は、わたしたちのために、またわたしたちと共に苦しむことを望まれました」（三十九番）。

日本の教会は今、ペトロ岐部と一八七人の殉教者を「神が起こされた不思議なわざ」として真摯に

想い起こし、「共通の記憶」として記念しようとしている。現代日本の教父の一人、溝部司教は問いかける。「混迷する時代に日本人としてイエスの福音を受け止め、その福音を支えに社会の苦しみと悲しみに寄り添って生き、やがてゆずることのできない神への思いを貫いて殉教した多くのキリシタンたち。なぜそのことを選び、そのように生き、そしてそのために死んでいったのでしょうか」。「殉教者たちの信仰は、過去の話ではなく、いまを照らす、あすへの道を示します。そのことを想い起こすと力がわいてくる話、その出来事なら日本のすべてのキリスト者が知っている、そのことから出発し、そしてまたそこへ帰る話。いま共通の記憶をまとめ、確認し、記念して生きるときがきました」（「列福をひかえ、ともに祈る7週間」より）。

古代のキリスト者はイエス・キリストのイメージとして「哲学者と羊飼い」の姿を石棺に刻んだ。「哲学者とは、本質的なあり方を教えることのできる人のことでした。本質的なあり方とは、正しい人間となる方法、すなわち、生き方、死に方のことです」。「羊飼いは、死の谷を通る道も知っている方です。だれも同伴することのできない、孤独な最期の道を歩むときも、わたしとともに歩き、最期までわたしを導いてくださる方です」（『希望による救い』6番）。教父ベネディクト十六世は、私たちの心に響く言葉で、キリストを指し示している。一人の神学者として、また教理聖省長官として活動してきた同一人物が教会全体の「羊飼い」として語りはじめると、それまでとは別の姿に変容し、

別の響きのある言葉を語るようになる。これは一年に一度、チェコから帰国するアルムブルスター神父の談話の端から教わった。

教父研究が市井の素朴な人々の心に届く味わい深い言葉で、人間の本質的なあり方を示唆する学問として、日本にも定着していくことを心より祈念する。